

第1回農業高校の学びの充実懇話会（報告）

1 日時

令和6年6月26日（水） 午前9時～午前11時

2 場所

県庁16階教育委員会室

3 出席委員

大久津委員、都外川委員、東園委員、迫間委員、上村委員、谷口委員、木場委員、園山委員、永吉委員、増永委員、米森委員

4 議事の内容

(1) 会長等の選出

大久津委員を会長に、都外川委員を副会長に選出

(2) 意見交換

平成28年度「鹿児島県における新しい農業教育推進のための検討会」での提言の内容及び県教委の取組、本県農業高校の現状を説明後、意見交換

5 主な意見の内容

- 小中学生へ農業の良さを伝えることは重要である。中学校での就業体験学習は商業系施設が多いように感じる。農業水産関連についても組み入れてもらえればよいのでは。
- 家庭の中で、情操教育の一環として家庭菜園で早いうちから収穫する楽しみを体験することが重要で、小中学生に収穫の喜びを繰り返し体験させることで、産業に興味をもってもらいたい。
- 今の子供たちがちょうど40代の中堅になる2050年には人口100億人とも言われる。食料危機に陥ってから人材を育成しても遅い。農業をしていなくても、農業ができる人材を育成しておくことが必要。小中学生や小中学校の先生方を含め、今、食の大切さをアピールして、食に対する興味・関心を高めておかないと将来の準備はできない。
- 消費者の中には、野菜等は、「きれい、安い、新鮮なもの」という意識があるが、世界には食糧危機に陥っているところもある。消費者一人一人が農業（食料）の大切さを理解するとともに、地域では最低限の担い手農家が必要であると広く社会が認識すべきである。

- 地元の小学校とも連携し、農業のかっこよさ（魅力）を伝える取組を行っており、遠足で牧場に訪れ、スマート農業の見学や、牛の搾乳などを体験している。牛肉やミルク、チーズの生産過程を学び、牛肉を試食することで、子供、保護者、先生方が農業の重要性を実感できる。また、枝肉共励会に出場した農業高校生に、海外を含む牛肉の流通について学ぶ勉強会を実施している。一昨年から、高校生が作った牛肉を会社で買い上げ、各地区のこども食堂に提供し、そこで、高校生たちに肉を提供するまでの課程について、子供たちへ話をしてもらおう。そうすると生徒の自信にもなり、子供たちにも農業の魅力が伝わる。農業の実体験や魅力を伝える場作りをする必要があり、民間、行政、教育庁が連携すれば、まだ良いものができるのではないかと考えている。
- 農業技術が進歩する中で、農業高校の教員が学校内に閉じこもることで、世の中の変化を把握できず、生徒に最新の知識を還元できない問題がある。教員が研修や視察に参加するための、予算措置を講じることが重要である。
- 農園で生産されているような有機野菜など、美味しいものを子供たちに食べさせるために、地元の野菜を活用することが重要である。給食を通じて地元の野菜を提供し、子供たちに美味しさを教えることが大切である。有機野菜の価値を伝え、食の文化を育てることが必要である。
- 高校の特色をもっとPRし、中学生やその保護者に対して高校の魅力を伝えるべきである。特に農業高校のように普通高校では学べない分野があることを知らせることが必要である。
- これまでの取組を見たとき、現地に赴く必要があるため、予算や人員の制約があり、単発の取組になる可能性がある。オンラインを活用することで研修の機会を増やすことが重要である。例えば、農業高校全体で共通のオンライン授業を導入することで、教育の質を向上させることができる。また、家畜防疫の観点から、畜産業界との連携をオンラインで行うことが有効である。
- 専門教育の実習において、1年生の農業基礎は共通で学ぶが、2年生になるとコースや専門の選択に分かれる。生徒数が少ないため、各作物や畜産の実習が厳しい状況もあり、家畜の種類や頭数を減らすことも考えないといけない。一方で、少人数教育のために指導が行き届き、安心安全な教育ができていているというメリットもある。